

(大阪西北部・大阪東北部)

大阪・五反島遺跡 ごたんじま

- 1 所在地 大阪府吹田市南吹田五丁目
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)七月〜一九八七年二月
- 3 発掘機関 吹田市教育委員会
- 4 調査担当者 藤原 学・増田真木・西本安秀・田中充徳
- 5 遺跡の種類 河道跡・祭祀遺跡
- 6 遺跡の年代 弥生〜室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
五反島遺跡は吹田市の南西部、神崎川右岸の沖積地の標高約3mに立地し、一九六六年の南吹田下水処理場建設時に発見された。その後下水処理場増設に伴い、一九八四・八五年度の二次にわたる試掘調査を経て本格的な発掘調査が一九八六年度に実施された。
その結果、合計七条に及ぶ河道跡、堤防跡が検出された。河道跡は古墳時代に属するものが一条、平安〜

室町時代に及ぶもの六条である。堤防跡は延長六〇mにわたって検出された。自然の砂の堆積を利用し、両側に杭と横木を組合わせて斜面を保護している。現在の神崎川と糸田川の合流点付近に位置することも勘案すると、河の合流点に設けられる瀬割堤と判断され、平安時代前期に構築されたと考えられる。

出土遺物は弥生〜室町時代まで膨大な量があり、そのうち古墳時代と平安時代にピークが認められる。古墳時代では土師器・須恵器などの他、韓式系土器・製塩土器・鉄剣・勾玉など重要な遺物も多く含まれている。また、平安〜鎌倉時代には土師器・須恵器・黒色土器・瓦器などの他、緑釉陶器・中国製陶磁器も出土している。土器以外には銅鏡・鐙・刀子・鎌・鋤・鉄鍬・竈などの出土があり、これらの一部は祭祀に用いられたと思われる。特に、鏡・鍬・馬具などは優れたものであることから、一地域の祭祀にとどまらず、むしろ宮廷に関する祭祀に使用されたと考えられる。その可能性の一つとして天皇の即位儀礼に関わる「八十嶋祭」を指摘しよう。

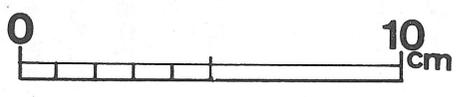
木簡は四点認められ、いずれも河道跡の堆積層から出土した。

8 木簡の积文・内容

(1) × 𑖀𑖂𑖄𑖆𑖇𑖈𑖉𑖊𑖋𑖌𑖍𑖎𑖏𑖐𑖑𑖒𑖓𑖔𑖕 為御子浄心浄栄

× 𑖀𑖂𑖄𑖆𑖇𑖈𑖉𑖊𑖋𑖌𑖍𑖎𑖏𑖐𑖑𑖒𑖓𑖔𑖕 四年供養

(218)×26×3 061



(2)

(2)

何事も可成ぬ 每自作是念 以何 [令衆生力]

得入無上道

速 [成就佛身力]

日九
 年十二
 享祿元年二月十七日

願以此功德 普及於一切
 我等与衆生 皆共成佛道

何事も可成ぬ

(3)

「南」

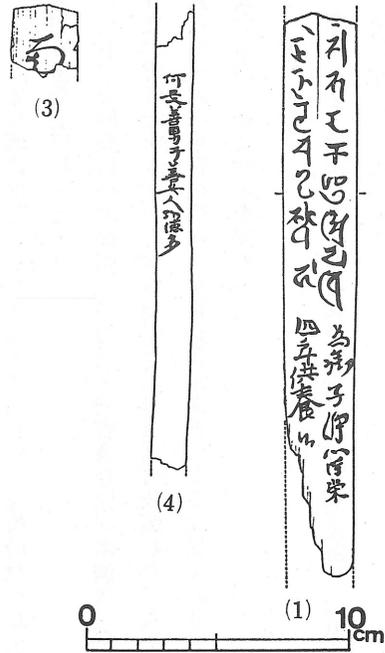
(4)

× 何是善男子善女人功德多
 [薩於力] [急難之中力]
 × 訶 怖畏 能

375 × 36 × 3 061

(27) × 24 × 0.3 061

(177) × 13 × 1 081



(1)~(3)は笹塔婆、(4)は柿経である。(1)は上下端とも欠失しており、片面に墨書がある。二行にわたって種子が書かれており、随求小呪の下半部にあたる。その下に、淨心淨栄のための四年供養とあり、追善供養の笹塔婆である。

(2)は細長い材を用い、頭部を五輪塔状に削り出し、下端をやや尖り気味にしたものであり、両面に墨書がある。表側の最上部の空・風・火・水・地輪の各部に五大種子を配し、その下にキリク(阿弥陀如来の種子)と左にサク(勢至)を記す。右は判読できないが、サー(観音)が記され、阿弥陀三尊を構成していたものと考えられる。その下には「毎自作是念……」と偈文が二行に書かれている。これは『妙法蓮華経』如来寿量品第十六の末文で破地獄偈といわれ、

板塔婆、板石塔婆によく使われるものである。元興寺極楽坊の笹塔婆D―二―十一にも類例がある。その下に、享禄元年(一五二八)二月十七日の日付がある。右側に「日九」「年」「十二」などの文字が確認できるが、これも年月日が記されていた可能性がある。

裏面は、五輪各輪に胎藏界真言を配する。その下に地藏菩薩の種子が記され、表面の阿弥陀三尊に対応する配置である。以下、「願以此功德……」は『妙法蓮華経』化城喻品第七にみえる偈文である。類例は多く、弘法大師坐像胎内納入経卷(元興寺所蔵)のうち、正中二年(一三三五)の年号のある『妙法蓮華経』卷一の巻末に書かれたものがあり、また、大宰府史跡第七八次調査SG二二三〇で出土した笹塔婆に類例がある。現在でも読経の最後に唱える回向文として広く使用されている。これに続く種子は胎藏界五仏と考えられる。その下の種子はやや不鮮明で、完全な表記ではないものの、「**サ**」「**ク**」の二字についてはそれぞれ釈迦如来、大日如来と考えられる。五輪塔形の塔婆の形態をほぼとどめ、紀年銘を有する重要な資料である。

(3)は極めて薄い材を用い、頭部を山形にし、左右に切り込みのある笹塔婆で、断片的にしか遺存していない。「南」一字のみ遺存し、下には「無阿弥陀仏」という文言が続くと思われる。

(4)は細長く薄い材の両面に墨書した柿経である。「何是善男子善女人功德多」は『妙法蓮華経』観世音菩薩普門品第二十五の四三行

目に当たる。裏は七八行目に当たり、二〇本一組で使われたことがわかる。

以上の笹塔婆はおおむね室町時代後期に、柿経は南北朝期に属すると判断される。笹塔婆の性格については『地獄草子』『一遍聖絵』にみられるような、墓地に立てられていたのが流されたとも、四十九院の塔婆とも考えられるが、河道の出土であることから、現在でも民俗例にみえる塔婆流しの可能性が指摘できる。室町時代後期成立の『七十一番職人歌合』の三十六番に、「いたか」と呼ばれる僧による塔婆供養の様子が描かれており、これが「流れ灌頂」と言われていたことが知られる。また、『言国卿記』明応三年（一四九四）八月一六日条には、山科言国が息子の定言の供養のために流れ灌頂を行なったという記載がある。今回報告する資料は、これらの文献にみえる流れ灌頂に関わるものとも考えられ、室町時代の仏教民俗を知る重要な資料となった。

なお、今回報告の木簡四点の釈文・内容及び図面精図は、勅元興寺文化財研究所人文考古学研究室藤澤典彦氏に依頼した、吹田市一九八九・九〇年度埋蔵文化財特殊鑑定調査による成果であり、藤澤氏から多くのご教示を賜わった。

9 関係文献

藤原 学・増田真木・西本安秀 「大阪府五反島遺跡」〔『日本考古学年報』三九 一九八七年〕

『摂津・五反島遺跡の検討』〔『古代を考える』五〇 一九八九年〕
吹田市教育委員会 「五反島遺跡の内業調査」〔『文化財紀要』二一 一九八九年〕
（西本安秀）